

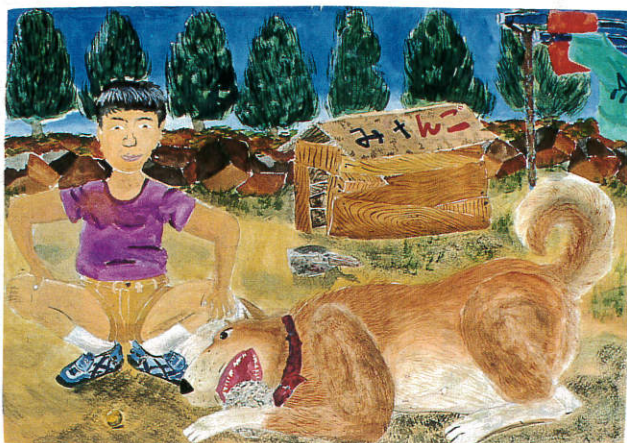
後援団体からの受賞作品

美育文化協会 会長賞

「愛犬」

愛知県名古屋市長あずま中学校

二年 佐伯 清裕



ねそべっている愛犬と清裕君の自慢げな姿が、とてもユーモラスに印象的に表現されている作品です。その中でも、清裕君が愛犬を見ている表情はとても印象的です。
絵の表し方も心がこめられていて、丹念に形を描き彩色しているところがすばらしいです。

日本児童文芸家協会 会長賞

「木の精こだま物語」を読んで」

福島県安達町立下川崎小学校

四年 菅野 吏理

はずきのさびしさを救ってくれたのが、セングンの木に宿る木の精「こだま」でした。こだまは、はずきを思う気持ちがいつばいで、枝の先は、どんなはずきの部屋の方にのびていきました。しかし、はずきは、大きくなるにつれて、こだまのことはわすれていきました。それでも、こだまは、あきらめずにはずきを思い続けます。かわいそうなこだま、そして、とってもきれいな心の持ち主のこだまに、わたしのむねが、キュツとなりました。この本を読んでいると、庭の右はじにある大きなサルスベリの木を思い出しました。小さいころ、夕方になるとよくのぼって空を見上げていました。その日は、花のピンクに夕日がきれいだったことを、今でも覚えています。わたしは、こだまと出会って、人のために一生けん命になれることは、とてもいいことだと思いました。わたしも家族や友達のために、何かをしてあげたくなりました。また、サルスベリの木のほかに、草花や動物、人たちとも「こだま物語」のような思い出をたくさん作りたいと思いました。ふだんはわすれていても、こだまのような人がいて、思い出のとびらをコンコンとたたいてくれるかもしれないと思ったからです。

(抜粋)

幻想的な「木の精こだま」の話を、自分の心とひびきあわせるように読んでいます。幼いころ、悲しい心をはげましてくれたサルスベリの木が、自分にとっての「木の精」だったことにふれたことで作品としての深みが増しました。

日本の子どもの本学会 会長賞

「絵日記」

新潟県新潟大学教育学部附属新潟小学校

二年 本間 美帆

生活の中の一瞬をダイナミックな構図に切り取って絵にすることにより、自分の書くこうとする場面をしっかりと認識しています。
赤ちゃんを初めてだっことしたときのことを「くびも手も足もふにやふにやしている」と表しているように、情景を鮮明にとらえた文章になっています。
絵と文章の調和のとれた作品です。



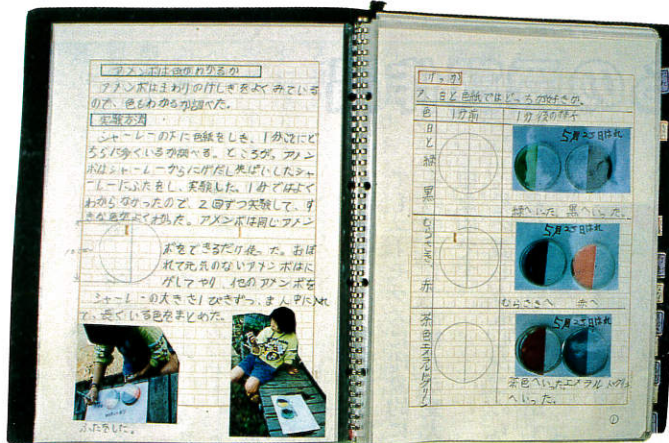
全国小学校理科研究 協議会 会長賞

「アメンボのひみつ」

千葉県市原市立国分寺台小学校
五年 柳池 英理

・アメンボは色がわかるか・どんな色を見分けるか・流れにどう動くか・どの部分を水につけて体重を支えているか・オスとメスではとぶ速さやきよりにちがいはあるか・どんな水に浮くか、などアメンボのひみつをしらべました。

「どんな水に浮くか」では、ジュース、す、酒、水、湯、しょうゆ、ソースなど、13種類の液体にアメンボを浮かべてみて、結果をまとめました。



身近な生物であるアメンボを、いろいろな角度から調べあげ、その動きのひみつにせまっています。

色はわかるのだろうか、どんなふうにいるのだろうか、温度によって動きはちがうのだろうか、などと、発想もとてもユニークです。

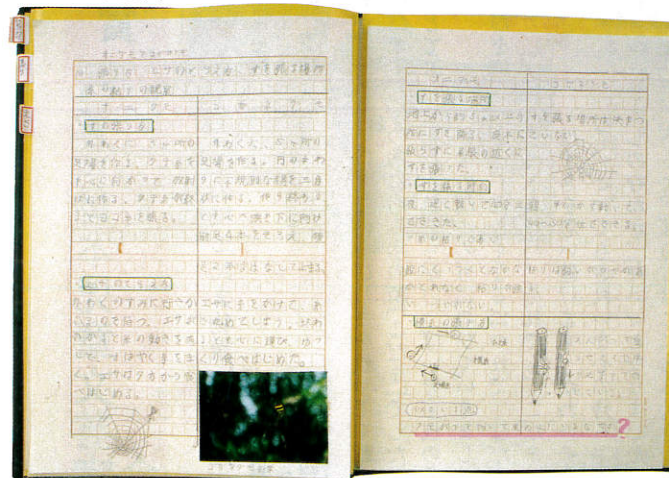
全国中学校理科教育 研究会 会長賞

「クモの研究—オニグモとコガネグモのちがい」

千葉県市原市立国分寺台中学校
二年 柳池 剛

巣作りのようす(できあがるまでの時間や順序など)／えさの取り方／縦糸と横糸の数のちがい／縦糸の張り方のちがい／卵の産み方と成長のちがい／下を向いているわけ／足のしくみ

などの項目において、オニグモとコガネグモのちがいを調べました。コガネグモの方が横糸の数が多くとか、足の先から油のようなものが出ていて、それで巣の上をうまく歩けるなどの発見がありました。



これは、とても時間がかかり、根気のいる研究です。研究をしたクモは夜に活動する生き物ですから、観察はとても大変だったでしょう。

縦糸と横糸の数の比較をはじめ、なぜクモは巣では下を向いているのか、などと発想がとてもすばらしい作品です。

全国小学校生活科教育 研究協議会 会長賞

「ひいばあちゃんがたいてくれたおかまのごはん」

千葉県市川市立富貴島小学校
二年 大沼 仁美

「ひいばあちゃん」に「おかまでたいたごはんを食べたい」と言ったら、作ってくれることになりました。昔ながらのおかまで米をとき、かまどにたきぎをくべて、ふうふうと火を吹きながらごはんをたいてくれる「ひいばあちゃん」。そんな「ひいばあちゃん」の後ろには、いつのまにか集まってきたお父さんやお母さん達家族みんなの姿がありました。

そしてとうとう、ごはんがたきあがりました。できあがったごはんは、ほかほかとしてとてもおいしそうです。「ひいばあちゃん」はお茶わんに、おこげも忘れず入れてくれました。生まれて初めての「おかまでたいたごはん」。家族みんなでおおいしくいただきました。



生活科らしいテーマを素直に表現した作品です。「ひいばあちゃん」の動作の一つ一つが生生きと描かれており、それを見守る一家のあたたかさにあふれています。また、絵が非常にすばらしく、ダイナミックで迫力があり、見る者をひきつけます。

日本社会科教育学会 会長賞

「校庭の前は大山街道」

神奈川県茅ヶ崎市立室田小学校
六年 岩城 陽子

校庭の前が、昔は大山参りでにぎわった大山街道なのですが、学校に通った六年の間にも、田畑が減って住宅が増えるなど、様子が少しずつ変化してきたそうです。その見慣れた街道を端から端までたどってみたい、という思いが岩城さんの研究動機です。

暑い夏のことなので早朝から街道を歩き、お年寄りや街道沿いの人々に話を聞き、歴史や史蹟を調べています。研究を通して、いつも歩いている道なのに、それまで知らなかった道の歴史を知り、「突然今があるのではなく、昔の多くの人たちの苦心と努力のうえに現在がつながっているという事」を実感し、自分自身も歴史の担い手であるという責任を感じています。



生まれ育った町を時間をかけて歩くという地道な研究が高く評価されました。既成の資料に頼ってはいられない説得力があります。また、写真や絵・地図が効果的に使われており、見せ方にも工夫がありました。

中央出版株 特別賞

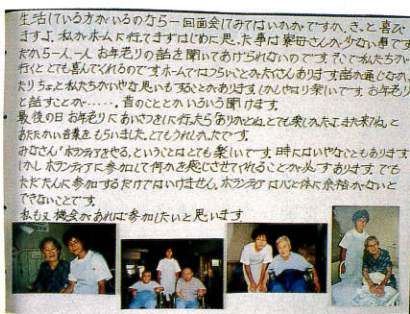
「私の老人ホーム5日間体験記」

愛知県名古屋市中区中学校
一年 江崎 綾乃

おじいさんが大病をしたときに看病の大変さを知ったことをきっかけに、ボランティアとは何か、介護の家族協力、施設での介護とはどういうものかなどの疑問を持つようになったそうです。そこで五日間ボランティア活動に参加した、そのときの体験が研究の基礎になっています。

特別養護老人ホームでの寮母さんの手伝いを通して、百人分の洗濯の大変さ、寮母さん一人当たりの負担の大きさを実感しています。

まとめでは、お年寄りの気持ちを思いやり、家族の愛情の大切さを訴えるだけでなく、その人に余裕がないときでしかないのではないかと、介護の難しさにも触れています。



老人福祉問題という、非常に現代的な題材です。頭で考えるだけではなく、体験を通して考察している点が評価されました。最後のまとめなどは、実際に経験した人でないと書けないことでしょう。

江崎さんの人柄がうかがえる作品ですが、中学生ということを考慮に入ると、今の政策と問題点を考察するなどの「研究」が欲しかった、という声もありました。

中央出版株 特別賞

「古典に出てくる虫と昔の人と虫の関係」

神奈川県茅ヶ崎市立浜須賀小学校
六年 守屋 昂

昨年、守屋君は「見かけが悪いために嫌われている」虫と人間とのかかわりについて調べました。そのことから、昔の人と虫との関係に興味をもち、万葉集や枕草子、そして美術工芸品、絵画、家紋の中に見られる虫を手がかりにして、昔の人がどんな虫からどんなことを感じていたのかを考察しています。

古典を調べていくうちに、蝶を詠んだ歌が一首もなく、こおろぎなどの鳴く虫を取り上げたものが多いことなど、守屋君の予想と違う結果が出ています。また、「蝶を捕らえるとわらわ病にかかる」というような、昔の人の虫に対する考え方や感じ方を虫の種類ごとにまとめ、人間は「古代からずっと虫と仲良くつきあってきた」と結んでいます。



人間と虫とのかかわりを追求するために、古典文学をはじめとして、さまざまな資料を調べるといって着地点がユニークです。膨大な資料に目を通した努力もさることながら、「虫のことをよく知らずに、汚い、気持ち悪いといって嫌わないで」という、守屋君の虫たちに寄せる温かい気持ちがこの作品をすばらしいものになっています。